**Difference between hand writing and digital writing**

**手で書くこととデジタルに書くことの違い**

Albertine Gaurは、名著”A history of writing”(The British Library)”の劈頭で、All writing is information storage”と記している。小松英雄は、その「日本語書記史原論」で、これを「すべての書記は情報の蓄蔵である」と訳している。

原稿用紙やメモ帳に、手書きで文字を書くことと、キーボードや音声入力装置を経由してデジタルテキストを生成することは、本質的に全く異なるものであることを認識する必要がある。

数千年にわたって続いてきた紙葉平面（石や竹などを含めて）に手で文字を書くことによって生成され、蓄蔵される文字情報は、視覚的なイメージ情報である。手で書かれた文字だけではなく、紙葉に印刷された活字やデジタルフォントを用いた文字情報も、イメージ情報である。一方、ワードプロセッサーからスマートフォンに至るまで、キーボードや音声入力（手書き入力も含め）で記録媒体に蓄蔵され、ネットワークをかけめぐる文字情報は、ビット列で表される記号（文字符号）の列である。

紙葉に手で書かれる文字情報が、視覚的イメージデータであり、さまざまな手段で蓄蔵され、伝搬されるデジタルデータが、符号化された文字の列である、という違いは、一般に認識される/認識されない以上に大きい。一口に書記技術といっても、伝統的な視覚表現を媒介とする伝統的な書記技術と、符号化文字列を媒介とする書記技術とでは、まさに共約不可能(incommensurable)な相違がある。

この相違は、従来のJLreqとJLreq-Dとの間に横たわる共約不可能性とも同型である。

この乖離に起因して、さまざまなトラブルが出来する。

以下、JLreqTFで話題に上った、そのいくつかの例を列挙する。

* ORCを用いてデジタル化された情報では、しばしば、平仮名の「へ」と片仮名の「ヘ」、平仮名の「り」と片仮名の「リ」が混同される。
* メカニカルなユニバーサルタイプライターでは、”l”（ローマ字のエル）と”1”（算用数字のイチ）を共有していたものがある。
* 符号位置に制限がある8bitアスキーやJIS X 0208では、制定当初、イメージ情報とデジタル情報の差異についての社会的意識が未成熟だったこともあり、例えば、”<(U+003C,LES-THAN SIGN)”や”>(U+003E,GREITER-THAN SIGN”は数学の大小比較の意味で用いられたり括弧の一種の「ギュメ」として用いられたりしていたが、ユニコードでは、「ギュメ」には、U+2039、U+203Aの符号位置が独立して与えられている。しかし、国や言語を問わず、U+003CやU+003Eを引用符的に用いている例が多く残っている。
* 日本語で、「〜」を長音記号の変形として用いている例は、枚挙に暇が無い。
* これら、視覚的な類似性ゆえに、意味的に異なる（文字名が異なる）文字や記号を、デジタルな文字情報に用いることは、排列や検索から、アクセシビリティ（音声によるデジタル情報の読み上げ）に至るまで、多くの混乱の元となる。

どのような媒体、通信経路を前提とした場合でも、デジタルによる文字方法の入力の際には、そこで蓄蔵される情報が、符号化文字の列であることを意識しておくことが、重要である。